

平成 26 年 5 月 23 日現在

機関番号：32665

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23658186

研究課題名(和文) 食嗜好と青果物流通の関連性に関する研究

研究課題名(英文) The Relevance of Fruit and Vegetables Distribution and Food Preference

研究代表者

宮部 和幸 (Miyabe, Kazuyuki)

日本大学・生物資源科学部・教授

研究者番号：40409066

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円、(間接経費) 540,000円

研究成果の概要(和文)：わが国の青果物流通は、欧米諸国とは異質の特質を有しており、それは食嗜好の独自性によるものと考えられる。しかし、食育基本法の制定が必要なほどに食が乱れており、そのこととも呼応して、青果物流通の機能が脆弱になり、食文化の一層の退廃を招きかねない状況にある。食嗜好と青果物流通の関連性に着目することによって、これからのわが国の青果物流通のあり方を展望することができる。

本研究では、わが国の食嗜好と青果物流通の関連性の理論的検討を踏まえ、世界に冠たる料理大国とされるフランスとの比較検討を通して、食嗜好が規定する青果物流通の特質と、わが国の食文化に寄与する青果物流通のあり方を展望した。

研究成果の概要(英文)：Distribution of fruit and vegetables in Japan has a different characteristic with EU countries. The characteristic depends on originality of the food preference, which is the basis of the food culture.

The purpose of our research is to get information about the relevance of distribution and food preference, and the effect of changes in food preference has on the distribution.

研究分野：農学

科研費の分科・細目：農業経済学 フードシステム

キーワード：食嗜好 青果物流通 食文化

1. 研究開始当初の背景

わが国の青果物流通は、欧米諸国とは異質の特質を有しており、それは食嗜好(集団の食嗜好を指し、食文化を育む基盤となるもの)の独自性によるものと考えられる。しかし、食育基本法の制定が必要なほどに食が乱れており、そのこととも呼応して、青果物流通の機能が脆弱になり、食文化の一層の退廃を招きかねない状況にある。食嗜好と青果物流通の関連性に着目することによって、これからのわが国の青果物流通のあり方を展望することができる。

食文化や青果物流通に関しては、それぞれの分野において既に多くの文献や資料が存在している。特に日本人の食嗜好については、栄養化学分野、文化人類学分野の研究業績は蓄積されつつあるし、消費者ニーズを踏まえた青果物流通の重要性を指摘する既存研究は少なくない。しかし、本研究のキーワードとなる「食嗜好」と「青果物流通」、この2つの関連性に焦点をあてた既存研究は皆無である。そのため、せっかく消費者ニーズの視点を重視しながらも、青果物流通の論議が流通のあり方に長期的な展望を与えるものになっていない。この2つのキーワードの関連性に着目することで、わが国の青果物流通の現状に理論的基礎と戦略的な体系性を確立させ、わが国の新しい青果物流通の方向を展望したい。

2. 研究の目的

本研究では、わが国の食嗜好と青果物流通の関連性の理論的検討を踏まえ、世界に冠たる料理大国とされるフランスとの比較検討を通して、食嗜好が規定する青果物流通の特質と、わが国の食文化に寄与する青果物流通のあり方を展望する。

本研究は、次の3つの目的を持っている。

第1は、わが国の食嗜好と青果物流通の関連性の理論的解明である。特にわが国の

青果物の流通システムが整備されてきた戦後以降に注目して、わが国の食嗜好の独自性と青果物流通システム形成との関連を明らかにする。その際、旧来の流通論やマーケティング論にとどまらず、食嗜好さらには食文化と青果物流通の関連をめぐる新しいパラダイムを提示する。

第2は、食嗜好が規定する青果物流通の特質の実証的解明である。第1での理論的考察を踏まえつつ、フランスとの比較研究を通して、食嗜好が規定する青果物流通の特質を、国内外においてフィールド調査を精力的に進めてきた経験をフルに発揮することによって、実証的に解明する。

第3は、わが国の食文化の維持・発展に寄与する青果物流通のあり方の提示である。長寿とも結びついているわが国の伝統的な食文化が正しく評価されないままに食の乱れが生じている。そのことは青果物流通機能の質的低下を招きかねず、少なくとも将来を展望した流通機能の革新を追及する意欲を弛緩させかねない。本研究の結果を踏まえて、わが国の食文化の維持・発展に寄与する青果物流通の今後のあり方を提示したい。

3. 研究の方法

本研究の目的を踏まえ、本研究では課題を次のように再整理して、取り組むこととした。

第1は、わが国の青果物に関する食嗜好と流通に関して、特に、戦後の青果物流通システムの変化について着目する。そこでは、増え続けている加工・業務用野菜を取り上げ、特に国内野菜産地の対応策を検討するとともに、わが国の青果物流通システムの変化を明らかにする。

第2は、フランスの青果物に関する食嗜好と流通に関して、フランスの青果物の消費などに関わる最近の変化とフランスにお

ける流通システムの変化について検討する。ここでは、ランジス卸売市場とリヨン卸売市場の卸売流通システムについてもふれることとする。

第3は、食嗜好が規定する青果物流通に関して、わが国の食文化の基礎となる食嗜好の構造変化を確認しながら、食文化の維持・発展に寄与する青果物流通のあり方を検討する。

そこで、本研究では、まず青果物流通のあり方を規定する要因を解明することに関わる既存の研究を整理し、食嗜好と流通の関連性ならびに流通の展開要因を明確にする。日仏両国の食文化の特質に関する研究の成果や統計を整理・分析すると共に、わが国とフランスにおいて、青果物の生産者・流通業者・加工業者、レストラン・料理技術者・食文化研究者といった「関係者」「関係機関」へのヒアリング調査を実施した。

したがって、本研究では、文献調査と共にヒアリングを中心とするフィールド調査を重視し、関係者、関係機関からのヒアリングなど現地実態調査でしか得られない情報や資料の収集に努めた。

4. 研究成果

本研究の成果として、主に諸点を指摘することができる。

第1は、食文化の基盤を育む食嗜好の構造変化である。近年、食嗜好に関する研究は蓄積されつつあるが、食文化の基盤としての食嗜好論は体系化されておらず、食嗜好の変化構造に関する研究は皆無に等しい。本研究で対象とした「食嗜好」は、個人の嗜好ではなく、集団の食嗜好（日本人の多くが共有する嗜好）である。食嗜好の構造は、食材や商品にかかわる情報によって、食の多様性（食の選択肢の拡大）によって変化する動的なものとして捉えなく

てはならない。本研究では、わが国の戦後の青果物流通システムの変化と、青果物をめぐる食嗜好の変化、すなわち、両者の関連性に注目することによって、食嗜好の構造変化を明らかにした。

第2は、食嗜好の変化は、青果物流通に様々な局面において影響を与え続けてきていることである。食文化の基盤となるべく嗜好、情報嗜好は、ともに青果物の消費に大きくかわり、そして流通のあり方さえも変化してきている。なかでもその食嗜好の均一化は、とりわけ、消費者の求める野菜の種類において、また生鮮、加工においてもみられるものである。

第3は、フランスにおける青果物の食嗜好及び流通である。(1)フランス料理そのものが、野菜を多く使うものであり、わが国と比較してもその消費量が大きいこと、(2)健康志向や安全性などの側面からも、良質な青果物に対する需要は高まりつつあること、(3)そうした中で、地産地消でもあり、地域固有の伝統野菜などを見直す動き、フランスの食生活の多様性も一層進展してきていること、である。(4)ただし、こうした多様性は、大規模小売業者ではなく、中小規模の小売業者が担っており、フランスでもわが国と同様、中小規模の小売業者は減少し、(5)卸売市場においては、青果物の品揃えの深さと幅を確保することが、自らの市場の生き残りとも密接に関係していることが明らかになった。

第4は、わが国の食文化は、青果物の素材を如何に活かすかが調理で問われ、すなわち、煮る、焼く、蒸す、茹でる、炒める、揚げる、和えるといった基本的な調理方法で、多品種少量で、かつ鮮度を大切としている。卸売市場をはじめとした我が国の青果物流通は、こうしたニーズを応えうる優れた機能、特に品揃えの幅と深さを持っているともいえる。市場は日本の食文化を支

える根本機能であるともいえる。長寿とも結びついているわが国の伝統的な食文化が正しく評価されないままに食の乱れが生じている今日、青果物流通機能の質的低下を招きかねず、少なくとも将来を展望した流通機能の革新を追及する意欲を弛緩させかねない。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

Kazuyuki Miyabe, Structure and Function of Dutch Study Groups As a Farm Service Establishment、食品経済研究、査読有、40巻、2012、pp.4 - 16

根師梓・藤島廣二、国内の緑茶飲料原料茶葉供給における企業間取引の成立状況、農村研究、査読有、114号、2012、pp.25 - 34

Hiroji Fujisima, Kazuyuki Miyabe, Seok Gon Yoo, Jun Hee Lee、Problems and Solution Measures for Wholesale Market System in Japan、International Associate of Area Studies、16、査読有、2012、pp.25 - 38

[学会発表](計1件)

Hiroji Fujisima、International Associate of Area Studies、Korea、Problems and Solution Measures for Wholesale Market System in Japan、2012年8月23~24日

[図書](計1件)

藤島廣二、筑波書房、市場流通 2025年ビジョン、2011、163

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：

国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宮部 和幸 (Miyabe Kazuyuki)
日本大学生物資源科学部・教授
研究者番号：40409066

(2) 研究分担者

藤島 廣二 (Fujisima Hiroji)
東京農業大学国際食料情報学部・教授
研究者番号：70287449

(3) 連携研究者

()

研究者番号：